

大阪工業大学 正 員 吉川 眞
 大阪工業大学大学院 学生員 ○富濱 栄一
 和歌山県 山口 将宏

1. はじめに

都市における公共的な外部空間は、一般市民の利用に供されることを目的としてつくられている。都市が高密度になればなるほど人々の肉体および精神的健康の保持のためにも、豊かなオープンスペースが必要とされるからである。一口に広場といっても、西欧の広場と日本の広場を比べてみると、かなりの違いが指摘できるが、それは日本と西欧とのオープンスペースの成立の過程の違いからくるものであると考えられる。

近年、予想以上に高密度化した現代の都市において、新たに大規模なオープンスペースを確保することは極めて困難な状況にあるといえる。このような条件の下、既存の公園を改修したり、小規模ながら都市居住者にうるおいを与えるような広場が少しずつ登場してきている。今までの単なる西欧型広場の形態だけの模倣から、本格的なわが国の広場の誕生といえるのではないだろうか。

本研究では、わが国の公共空間整備事例を、分類し、類型化を試みるためにその端緒として、とくにわれわれにとって身近な大阪市内に最近創出された広場を分析、検討する。

2. 広場のタイプ

広場を歴史的成立要因で分類する際、大きく分けると、西欧的広場と日本的広場に分けることができる。前者は、恒常的に広場としての働きを持つ。後者は、代用広場と呼ばれ、日常的には他の用途を持つが、特定の条件の時のみ広場としての役目を果たす。本研究では、近年の日本における、恒常的広場を取り扱うことを目標として、大阪における整備例をもとにいくつかの分類を試みている。ここで、今回取り上げた整備例は以下の6つである。①ヤングスクエア：府立青少年会館前の駐車場を広場として整備したものである。②相合橋：歩行者専用橋上をポケットパーク化したものである。③御津公園：都市の商業、文化密集地の三角形のデッドスペースをコミュニティ広場として修景化したものである。④OMMビルサンクンガーデン：特定街区制度による、民間ビルの公開空地である。⑤天保山マーメイド広場：ウオーターフロントにおける民間美術館の中庭広場である。⑥大阪ヒルトンホテルアトリウム：総合設計制度による公開空地である。

2. 1 立地条件による分類（表－1）

1987年太政官布告により、わが国にはじめて法規に基づき公園が設置された。公共的広場にはその名残りが残っており、現代の公共的広場においても形態・概念上も西欧広場の模倣があり、画一化されたものとなっている例が見受けられることが多い。公共的なものと民間的なものの相違点は、前者は市民の安全、余剰地の有効利用といったような、社会基盤の整備というニュアンス

表－1 立地条件による分類

公 共 的	施設の前庭・公開空地	①
	歩行者空間	②
	交差点角地	③
民 間 的	施設の前庭・公開空地	④
	商業施設の中庭	⑤
	アトリウム	⑥

があり対象が不特定多数であるのに対し、民間的なものは利用者のターゲットを絞り込み計画している。上記の①②③は公共的なものであり、特に①②は景観の修景を行うにあたって駐車場や単なる橋であった従前の用途を、親しみ感のある広場として再生させた例である。③は有名建築家を登用して地域住民とのコミュニケーションも含めた計画により成立した。民間的なものである④⑤⑥のうち、④は単に公開空地を設置して容積率を稼ぐことにのみ固執せず、快適な空間を設置することにより本体施設の付加価値までも高めようとしたものである。⑤も④と同様であるが、ウオーターフロントという今注目されている空間に本体建物と、広場による相乗効果により空間の有効性を求めたものである。⑥は大阪の超一等地の建築のアトリウム内に公開空地として設置された例で、公開空地としての広場の機能とホテルのエントランス機能をも兼ね合

Shin YOSHIKAWA, Eiichi TOMIHAMA and Masahiro YAMAGUCHI

わせた、新しいタイプの広場といえる。民間的な広場は、他のものとの差別化こそが、存在価値の根元ともいえるので、バラエティに富んだものとなっている。

2. 2 平面形態による分類（表－2）

平面上の形態を単に矩形か矩形でないかで分類した。矩形の平面形態は人間に心理的安堵感を与える。人は頭の中に空間的座標を持ち、自己と外部空間の関係を認識しやすい平面形態に安堵感をおぼえる。それがその場の心地よさにつながると考えてよい。逆に非矩形は、一瞬で認識することは困難であるがそれによる意外性、期待感が人の心理に影響を与えることが考えられる。②は橋の高欄、④はレベル差によって生じる隔壁、⑤は建物と海というようなさまざまな空間を閉鎖する要素によって、矩形に空間を限定し、利用者に精神的な支配感を与える。①は広場内の建造物の死角によって、⑥は室内広場としての閉鎖性とガラス越しの外景がさらに意外性と、期待感を増幅させる。

表－2 平面形態による分類

矩形系である	② ④ ⑤
非矩形系である	① ③ ⑥

2. 3 立体構成による分類（表－3）

広場が立体的に構成されているかないかで分類した。人間は近景、中景、遠景とバランスよく構成された奥行感がある景観に心地良さをおぼえる。しかし高密度化した都市内に水平軸方向の奥行感を求めるのは困難であり、立体的起伏を設け、垂直軸方向の広がりにより奥行感を疑似体験させる効果を期待する。②③は公共施設でもあり立体化によるコスト増をしてまでの広場の演出は行われていない。民間の④⑤⑥が立体構成を行うのは理にかなったことであるが、①は公共施設にも関わらず立体構成を用いた演出により広場を効果的なものとしていることはあたらしい試みである。

表－3 立体構成による分類

立体的な構成を持つもの	①④⑤⑥
立体的な構成を持たないもの	②③

以上3種の分類を行うことにより、基本的には8種類の組み合わせができる。今回取り上げた大阪の6つの広場は以下の5つのタイプにあてはめることができた。限られた範囲ではあるが、民間施設において立体的な構成を持たないものは、今回はなかった。これは、民間施設が限られた規模の中で、最大効果を得るための手段として、積極的に立体的な構成を取り入れている姿勢がよく現れているといえる。

1) 公共施設で、矩形を基本とした平面形態を持ち、立体的な構成でないもの。

相合橋

2) 公共施設で、矩形以外の平面形態を持ち、立体的な構成であるもの。

ヤングスクエア

3) 公共施設で、矩形以外の平面形態を持ち、立体的な構成でないもの。

御津公園

4) 民間施設で、矩形を基本とした平面形態を持ち、立体的な構成であるもの。

OMMビルサンクンガーデン、天保山マーメイド広場

5) 民間施設で、矩形以外の平面形態を持ち、立体的な構成であるもの。梅田ヒルトンホテルアトリウム

3. 今後の課題

公共的な施設としての広場は、人口比に対して機械的に設置されていく。一方、民間的な広場は、その直接的な目的が、広場自身ではなくそれに付帯する施設への集客力への期待にあるとしても、いろいろな工夫や試みがなされていることは否めない。西欧的広場の形態的模倣に始まった日本の広場もここにきて新たな展開を迎えようとしている。単に形態上の分類を行うことにより、広場の性格を説明することは困難である。広場には、Activityを誘発する要因が必要である。歴史的な伝統のある西欧の広場には、Activityを誘発する要因として、広場周辺の歴史的建造物、広場の中にある彫刻、噴水などの建造物など実体験できるモノ。または、人をひきつける情報などの文化的要因も重要である。さまざまな価値観が複雑に絡み合い、多面性を持った空間として都市内における広場は成立する。

今後の課題としては、複雑な都市における広場の実態をActivityを付加した視点による分類も含め、できる限り簡易に、さらには視覚的に認識できるようなモデルの構築、分類指標の拡充を図りたいと考えている。

【参考文献】三浦 金作、『広場の空間構成』，鹿島出版会，1993